

経と図：清代における経書の読解法について

廖娟

はじめに

儒教の經典研究においては、遅くとも北宋時代から図解が大量に導入されるようになった。その証拠の一つは楊甲が作った『六経図』である。方法論としての図形を用いて難解な経書の文字を直観的に描くことは、五経の解説に頻用された。『書』には「洪範」篇の九疇図や「禹貢」篇の地理図、『詩』には名物図、『春秋』には帝王世次図などが頻出し、経書理解においては確かに利便性があるといえる。特に易経学と礼経学の両分野においては、文字上の問題を図形で説明することが多い。これは、易には、象という伝統的体例及び抽象的な易理を語るといふ側面があり、礼には、礼器と方位などを説明するという側面があり、これらはいずれも図という素朴な形式によって、限りなく多くの意味を直観的に解析できるためである。

清代に至ると経書に対する研究はそれ以前の時代よりも考証的になった、というイメージが従来形成されてきた。確かに清代の経学

には、経学の流れを改めて整理しつつ、宋代以前の学問を大量に視野に捉えようとする性格がある。そのなかで、経書を可視化するという図解の方法が一層精密さを高めつつ、新たな創造も見られるようになった。本稿は、経書を読解する際に清代において広く利用されていた「図」の方法やその思想上における意味に触れてみたい。⁽¹⁾「図」の方法論について、特定の時期に分けられるわけではないが、清代の図解の特徴といえば、として次の三点を挙げることができる。すなわち、①図形の対象は宋明時代の学問とやや異なり、たとえば、易については漢代易学の知識を解説するものが大量に増え、②張之洞が「諸経の図表、皆な国朝人を以て善と為す」と述べたように、清代の研究者たちは図形解釈に秀で、これ以前の時代より優れていると考えられており、③図解の正統性や有効性について、概念的議論が多々紛糾することとなった。この三点に基づいて、本稿は図形利用の典型的な二大分野、すなわち易と礼における清代の図解方法論の発展を考察するものである。

一 易図について

1. 易図否定から易図肯定へ

清代の易図評価について、『四庫全書』の館臣は、「宋に至りて象数の中に復た図書一派を岐出す（至宋而象数中復岐出図書一派）」と述べ、図書の学を正統の學術とは一致しないもの、すなわち「易外別伝」と評価した。劉牧は『四庫全書』の館臣によって図書易の首唱者と位置づけられた。劉牧がその端緒を開き、彼の前には陳搏、种放、穆修、李之才の名があり、彼の後には邵雍、黄黎献、呉秘、程大昌、葉昌齡、宋咸、李覲、蔡元定、朱熹がそれぞれ図について訂正と創造を加えつつ、それに続いて胡一桂、董楷、呉澄らが朱熹や蔡元定の図を尊び継承した。明代中期以降、易学の主流を占めた朱熹の『周易本義』の冒頭に附された九図が、絶えず批判されたことはおそらく事実であった。清朝の考証学を啓いた顧炎武は『日知録』巻一の易に関する札記に、「陳希夷の図、邵康節の書は道家の易で：その易は方術の書となった」といい、「今の図象を穿鑿して自ら能と為せるものは、聖人に畔くもの」と断じている。王夫之や黄宗羲もまた同様な歩調を示した。それに対して、清代初期中期の王懋竑（一六六八〜一七四一）は『白田草堂存藁』「易本義九図論」において、その批判の流れを記録しつつ易図は朱熹の作ではないと、朱熹弁護論を呈している。これらは朱熹の九図に対する態度として典型的な二つの立場であろう。総じていえば、現代の学者である戸田豊三郎が「清朝易学管見」において提示した、「清朝の易学は朱子の易図の批判に始まる」という判断は、非常に合理的

かつ主流な意見であろう。

現在の学界では、清代易学が易図の使用を宋代易学の特徴とみなして批判してきたという側面に対して特に注意が払われ、数多くの論文や研究書によって解明されてきた（林慶彰『清初的群經辨偽学』など）。それらの先行研究は、主に黄宗羲（『易学象数論』）、黄宗炎（『図学辨惑』）、朱彝尊（『太極図授受考』）、毛奇齡（『河洛書原舛編』）、胡渭（『易図明弁』）などに対する分析を通じて、河図・洛書、先天四図、太極図などの易図が排斥されたという清代學術上の傾向を論じている（林前掲書六五〜一三三頁）。このような研究とは趣旨を異にし、清代における易図使用の重要性を専ら強調する研究が、近年來学界で台頭し、『周易図說總彙』（李申・郭彧、上海華東師範大学出版社、二〇〇四年）や『易図講座』（郭彧、華夏出版社、二〇〇七年）などの数多くの参考書がすでに出版されている。特に後者は、多くの紙幅を割いて清代の易図を収集し分析したうえで、清の学者たちが考証学の方法で宋代易図を攻める一方で、それを部分的に発展させ、図解による易学は多元的な局面を呈したことを指摘している。そのほか、徐芥庠・鄭吉雄・陳居淵などの研究者も、清代における図書派の存在、及び易図の使用を詳しく分析してきた。

本稿は、これらの先行研究を踏まえ、清代の易学において、具体的な易図が批判の対象となる一方で、方法としての図の使用が認められていたという事実注目したい。まずは、胡渭（一六三三〜一七一四）と、胡煦（一六五五〜一七三六）を例として挙げてみよう。

胡渭、字は臚明。彼が六十八歳の時に完成した名著『易図明弁』

は、黄宗羲・黄宗炎・毛奇齡などの諸先輩の易図批判を承けて、九図の権威に対し逐一反駁したものである。巻一において、河図洛書の象は「周易古経及び注疏とも列するものはなかった」と述べ、宋以来の易研究者たちが「(河) 図 (洛) 書に汲々としている」ことを批判し、宋学の中核たる易九図の正統性を否定した。それゆえ、梁啓超は『清代學術概論』において「胡渭は：図を陳(希夷)・邵(康節)に還す：宋学は已に致命傷を受けた」と評価した。胡渭の易図批判の過程については贅言を控える。

とはいえ、胡渭の易図に対する認識は単純なものではないと筆者は考える。次の引用文を見てみたい。

古には書があれば必ず図があり、図は書の表現しきれないところを補うものである。およそ天文地理・鳥獸草木・宮室車旗・服飾器用・世繫位著の類は、図がなければ、隠された形状を示すことができず、古今の制度を明らかにすることができない。故に、『詩』『書』『礼』『楽』『易』『春秋』はみな図がなければ成立し得ないが、ただ『易』は図を用いず、六十四卦、二体と六爻の画が、即ちその図である。

胡渭が『易図明弁』の題辞で述べているのは、単純な易図排斥というよりも、さらに複雑な図解認識であろう。彼は「書があれば必ず図がある」という構想において、經典の解釈を補うために、図形を不可欠なものとして理解している。また、図形の中に、文字では解明できない隠された内容もある。ただし、六経において、『易』は特殊な經典であり、図形を用いる必要はない。なぜならば、六十

四卦の二体六爻は、元々図で示されているからである、とする。この考えをより正確に把握するならば、胡渭が『易図明弁』において反駁しているのは九図の源流、つまり九図がどのように、誰によって作られたのか、という問題だけである。彼の「図が書の表現しきれないところを補う」という文言からみれば、方法としての図形解釈を承認していた、といっても過言ではなからう。

次に、主として胡煦の易図構想を述べる。胡渭よりやや後の胡煦は龐大かつ精微な『周易函書(約存/約注)』の作を世に残したが、その学は久しく重視されてこなかった。胡煦、字は滄曉、号は紫弦、河南光山の人、康熙五十二年の進士。少年期から先儒の学に志し、読書の際には経世致用を求めた。八歳の時に太極図の陰陽が循環して互いに取り巻く形を見、寝食もままならなかった、という。『易』に長じ、遂に生涯にわたって易学に専念した。『周易函書』のほかに、『卜法詳考』などを著した。胡煦の学説には、河図洛書を易の大原に推闡し、易の妙を象数的に図で示す、という傾向を看取り得る。『周易函書』の冒頭に、河洛・先天図後天図・循環図などの図解を大量に導入し、数・象・図を統合して天地の理を表す体系が示されている。『周易函書約存』巻首の「原図約」に、

道理は文字より明らかであり、文字は図書に由来する。図とは、数の聚まりであり、象を示す手段であり、また理の寓するところである。：「中略」：思うに、文字は浩繁であるが図象は簡約であり、文字は顯然として平易であるが図象は隠然として深奥である。(文字の意を図象に納めるのは) 万を一に蔵し、須彌を芥子に納めるかのようなのである。

胡煦は文字と図象の関係への着眼がすぐれていたようである。すなわち、文字は煩雑であるのに対して、図形は簡約である。文字は顕然であるのに対して、図形は隠然である。故に、小さなものに大きなものを納めるように、図形が表現し得る内容は豊富である。このように、清朝初期に多くみられる易図批判という立場に対して、胡煦には易図を支持する傾向が見られる。さらには図が文字より先に存在していたはずだと主張し、易図の重要性を強調している。また、彼は『周易函書』の「自序」において、自分の易図認識を以下のように如実に記載している。

周易にはただ卦と爻が設けられているが、図象は実に終始本末の全体を総括している。図と象を検証すれば至理がそこに存在する。図と象を用いずにただ至理を表明することはできない。図と象は形のようなもので、理は影のようなものである。影は形に即して存在する。形がなければどうして影が現れるのだろうか。図と象は日と月のようなもので、理は光明のようなものである。光明は日と月に即して具わり、日と月がなければどうして光明が生じるだろうか。^(七)

ここで、胡煦は理と図のダイナミックな関係を「影と形」になぞらえて説明している。易の卦や爻は単に不完全なものであるから、図や象は有益な補足であると主張し、図や象を用いなければ、理を表明することはできず、図・象と理の関係は形と影、日月と光明のように、後者が前者に依存するということを論じている。

胡煦の易説には独自性があり、単に人事や倫理の面から易理を説く立場をとらず、宇宙生成論的な角度から易の根源を究めようと試みたものと理解される。ただ、彼の易図構想は主流にはならず、同時代のほかの易学者と相容れぬ場合も多い。だが、清朝中期以前の易経観を説明するには、従来注目されてきた王夫之・黄宗羲・毛奇齡らの資料のほかにも、より広く文献を検証する必要があると思われる。前述した内容はやや不十分であるが、易図否定と易図肯定という二種の傾向がともに存在したことは看取し得る。九図を批判する胡渭でさえ「古者、有書必有図、以佐書之不能尽也」と述べ、方法としての図形の使用に強く反駁していたとはいえない。また、ほぼ同時代の胡煦は、さらに踏み込んで文字よりも図の方が重要であると主張していたのである。この二人のほかに、清朝の図解方法を利用した易作品を試みに挙げてみよう。^(八)

胡世安	『大易則通』
胡渭	『易図明辨』
孫宗彝	『易宗集註』
喬萊	『喬氏易俟』
胡煦	『周易函書』
張伯行	『周子全書』
張沐	『周易疏略』
包儀	『易原就正』
江永	『河洛精蘊』
德沛	『易図解』
沈起元	『周易孔義集説』

- 楊方達 『易学図説会通』『易学図説統聞』
- 梁錫璵 『易学啓蒙補』
- 饒一辛 『経義管見』
- 上官章 『周易解翼』
- 王芝藻 『大易疏義』
- 張祖房 『易元図』
- 呂調陽 『易一貫』
- 王琰 『周易集註図説』
- 趙継序 『周易図書質疑』
- 張惠言 『易図條弁』
- 崔述 『易卦図説』
- 焦循 『易図略』
- 馮道立 『周易三極図貫』

など多数あり、枚挙にいとまがない。なかでも、旧図（主に九図）を敷衍しつつ、新図を演述するものが夥しい。次の節では太極図と爻辰図の二種類を例として挙げてみよう。

2. 清代における太極図と爻辰図

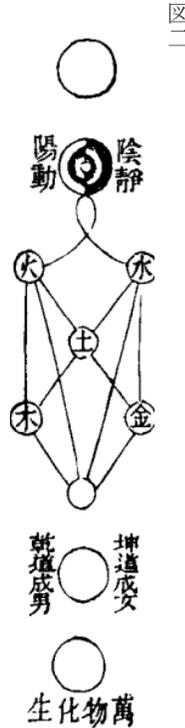
① 清代の太極図…胡煦の「循環太極図」を例として

本稿で紹介する胡煦の「循環太極図」には新たな発想が見られる。「太極図」という名称を持つが、周惇頤の図とは異なる図形が

以下のようにいくつか存在する。

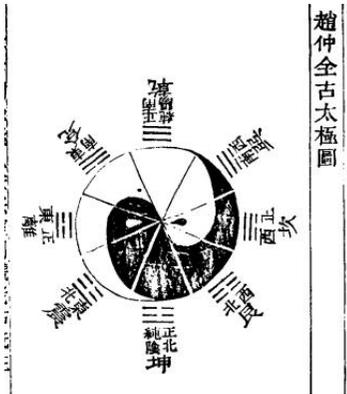


図一



図二

図三



図四



- 図一・宋 劉牧、『易数鉤隱図』「太極第一」、四庫全書本^(一)
 図二・宋 周惇頤「太極図」、性理大全本^(二)
 図三・明 趙撝謙（一三五一〜一三九五）『六書本義』「古太極図」、張惠言『易図條弁』からの複写^(三)
 図四・胡煦「循環太極図」、『周易函書約存』、中華書局本

胡煦はその書『周易函書約存』巻首に「原図約」を設け、数多くの易図を記録しつつ評価した。図四が示しているように、一見してこの図には宋代の太極図とは大きな違いがあることがわかる。点がなく、一個の丸のなかに、魚図とやや異なる黒白の形を周縁に配置して、中央に白い丸一個を設け、白い丸の内部と円外には文字がある。外の文字には先天数の順番で八卦を配列し、中心部の文字は八卦の陰陽を形容する。図一・二・三と比較すると、趙撝謙の「古太極図」に似ているといえるが、異なる点も多^(一三)い。

彼は以下のように、『周易函書』の「自序」において「循環太極図」の要点を述べている。

そもそも往來の理は先天の四図に最も備わっている。ゆえに私は循環太極図を修訂し、また変化卦象などの七図を作成し、先天の義を明らかにすることとした。憶測によるものではない。私はまた、先天四図を久しく探究して玩んでいたが、その趣旨を体得し、太極の一図はすなわち先天円図の変化したものであり、先天円図はまた河図の変化したものであることを知ったのである^(二四)。

この前後の文脈を簡単に紹介すると、胡煦は明の來知徳の錯綜説を批判し、例えば兩卦の錯綜はただ内卦と外卦の主爻の働きであり、各爻の往來関係ではないと述べた。陰陽の往來の理は先天四図（伏羲八卦次序、伏羲八卦方位、伏羲六十四卦次序、伏羲六十四卦方位）に全て備わっている。さらには、この循環太極図の変化は先天円図に基づくものであり、先天円図は河図の変化に基づくものであると宣言している。これによれば、彼の「循環太極図」は河図と先天円図から発展したものと見てよい。

「循環太極図」は胡煦自身が「庚寅三月夜寐時」（一七一〇年）に作ったものであることが、図の後文で説明されている。また、彼は以下のように述べる。

この図は河図及び先天八卦と似ているが、その二図を組み合わせてこの図を為したのではない。そのなかで、循環不息の機や

先天と呼ばれる義は、いずれも肉眼で見ることができない。河図の象は、奇数の一が北内に生じ、奇数の三が東内に長じ、そして奇数の七が南外に出て、奇数の九が西の外に尽きる。偶数の二が南内に生じ、偶数の四が西内に長じ、そして偶数の六が北外に出て、偶数の八が東外に尽きる。これは、河図の中にもともと具わっている循環の義である。先天八卦図は河図に則して描かれたものであり、坎と離が交接するところは、乾と坤が真ん中で交じわる象である。震の一陽が坤の内に生じるのは、即ち奇数の一が北内に生じることであり。：〔中略〕：その上下が徐々に盛んになる定分、及び内外が終始する方位は、すべて河図に相似するものであり、それ故に河図に則して描かれたものだという。よって、伏羲が描いた先天の図もまた河図に基づくものであり、その循環の義を具えている。：〔中略〕：後人はただ文王が易の図を作ったと理解し、各々卦の上に留意するのみであり、伏羲が最初にこの図を描いたことを理解できなかった。陰陽の画は連続的で断ち切れず、もとより氣と機の間関する妙を具えているので、そこには混融して円転しつつ、活発に流通する循環不息の旨があるが、渺然として（肉眼では）見えない。今この二図に基づき、循環太極図を作成した。これにより、八卦と河図の断ち切れない蘊奥を認識できよう。^(二五)

ここで、図四を参照してみよう。胡煦は河図と先天図の二図を同じ趣旨を持つものとして理解し、易の「循環不息」^(二六)の理がこの二図で如実に示されていると語っている。そして、乾一・兌二・離三・震

四・巽五・坎六・艮七・坤八の數、東西南北の方位、及び陰陽の文を象徴する二氣が有機的な総合体として、この円図に明確に表されている、という。私見によれば、「循環太極図」が河図・先天図に基づいて作られたということは事実であるが、單純に河図・先天図のままでもとめたものではなく、新たな発想を含む創作である。その新たな発想が、河図・先天図の二つの系統を一つに統合したのではないかと考えられる。

その上、胡煦は以下のように、「太極」「無極」という概念について、周惇頤の太極図とは異なる理解を語っている。

周子はなぜ忽然と無極の仮設を提起したのか。陽が極まろうとする時、もとより陰は備わっていないが、陰が既に生じるに至り、その陰を生じる陽極を顧みれば、すではるか遠くにあつて見ることができない。陰が極まろうとする時、もとより陽は備わっていないが、陽が既に生じるに至り、その陽を生じる陰極を顧みれば、すではるか遠くにあつて見ることができない。故に太であると同時に、また無なのである。^(二七)

このように、胡煦は陽と陰は互いに消長するものであり、陰の極に、陽はないが、陽が生じるといいながら、「太」と「無」が同時に存在する状態であり、「無極」から「太極」が生じるという生成論の関係は存在しない、と理解している。このような捉え方は、清代の胡煦が宋易の図を踏まえつつ、さらにそれを乗り越えて新たな図象を創造したのみならず、概念に対する理解にも新見を加え、独自の説を樹立したと理解すべきであると思われる。

② 清代の爻辰図

この項では、主として清代における爻辰図の新展開を述べる。漢の鄭玄は『易緯』に注釈を施す際に爻辰の説を重視し、一種の重要な体例として扱っている。太極図が宋学の中核であるのに対して、爻辰図は漢易の対象であり、そこに準的を置いたのは江蘇呉県の恵氏である。漢易復興を唱える恵棟（一六九七〜一七五八）は『易漢学』において、爻辰の説を鄭玄の『易緯』の記録に基づいて考案した。その中で、鄭玄の説について、

『易緯』乾鑿度に曰く、「乾は陽である。坤は陰である。（両者は）並び進んで交錯し運行する。乾は十一月の子に貞し、左に六つ陽の時を行く。坤は六月の未に貞し、右に六つ陰の時を行く。それによつて一歳を順成し、一歳が終われば屯卦と蒙卦に従う」と。また云く、「陰卦の爻は陽卦の位置と同じになる」と、一辰（一月）を退いて一未を貞と為し、その爻は一辰を隔てて右に行き、そして六つの辰がまた始まる」と。^(二七)

と簡潔にまとめている。

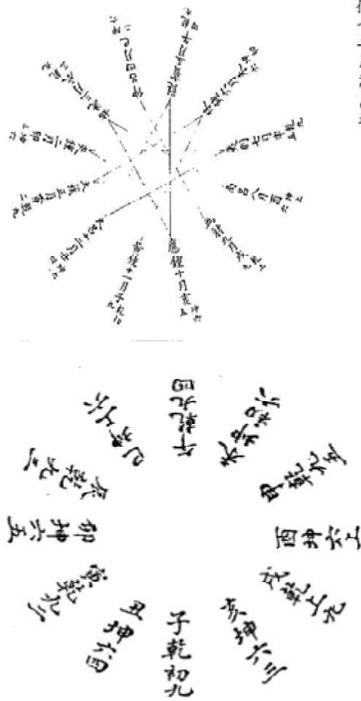
恵棟は、爻辰説の要点を、乾は子から左に行き、坤は未から右に行くことだと把握している。爻辰の説に対して、実際に爻辰の図を最初に作ったのは宋代の朱震である。その中で、朱震はさらに十二律を配当して図を作成した（図五）。恵棟は再び漢易における爻辰説を考究したうえで、さらに朱震の図を検証し、易緯の説が十二

律相生図と合致することに同意するが、朱震の説には誤りがあると指摘する。その理由は次のようである。

宋儒の朱子発が作った十二律図においては、六二は巳にあり、六三は卯にあり、六五は亥にあり、上六は酉にある。（その図では）坤は未に貞して左に行く。それは甚だしく誤っている。^(二七)

図五

図六



（図五）朱震「十二律相生図」、『漢上易伝』四庫全書本）

（図六）恵棟「十二月爻辰図」、『易漢学』中華書局本）

恵棟の考えによると、朱震の誤りは坤の爻が未から左に回らないということである。恵棟自身が作り直した「十二月爻辰図」は図六である。このように、恵棟は宋儒によつて作られた図形を排斥した

というよりも、むしろ訂正したといったほうがよいだろう。つまり、方法としての易図を廃棄するのではなく、それに一層正確性を求めているのである。その上、恵棟は朱震にはなかった文・辰と星宿を配当する「文辰所值二十八宿図」も作った(図七)。なお、恵棟の影響を受け、易学に一層の精錬を加えた張惠言は、また恵棟の文辰図をも自著の『易義別録』に継承したが、ここでは贅言を控える。

図七



図八



(図七) 恵棟「文辰所值二十八宿図」、『易漢学』中華書局本
 (図八) 李道平「鄭氏文辰図」、『周易集解纂疏』中華書局本

清代には、恵棟のほかに易を研究した人物の中に、宋代に盛んになった図の方法によって、漢代の文辰説をより複雑な図に作り変

えた者もいる。例えば、李道平(一七七八〜一八四四)は自作の『周易集解纂疏』において、「鄭氏文辰図」を提示した(図八)。また、易図を創造する動きは清末に至っても止まず、何秋濤(一八二四〜一八六二)は清末に外交官として活躍しながら、易を研究し、さらに恵棟と張惠言の図は簡略すぎると見て、十二次と節気を図に加え、一層複雑な五層の円図(図九)へと発展させた(図九…何秋濤「文辰図」、『一鏡精舍甲部彙』(華東師範大学図書館蔵清光緒五年淮南書局刻本影印本)。そのほか、後の曹元弼(一八六七〜一九五三)は、両湖書院の士人向けの教科書『周易学』にも、恵棟と張惠言らが作成した易図を大量に収録した。

これらの新たな易図からみれば、清代の易研究では図形が頻繁に用いられ、抽象的な易の学問を説明する際に確かに役立てられていたといっても過言ではなからう。

図九



二 礼図について

1. 従来の礼図解釈

現在我々が見ることのできる最も古い礼図は恐らく、一九七三年に長沙馬王堆三号漢墓から出土した「喪服図」である(図十)⁽³⁰⁾。ま



図十：喪服図残卷、一九七三年
長沙馬王堆三号漢墓から出土

た、陳振孫『直齋書錄解題』と『宋史』芸文志の記録によれば、宋代以前に図形で礼器を描くという方法が、五代の聶崇義によって撰された『三礼図集注』において体系的に反映されている。聶氏に先立つ鄭玄による六つの『三礼図』は現存しないが、後述するように、これらが作られていたことは確実であると考えられる。

礼図の使用について既に宋代から集大成的な作品が世に問われ

た。それは、朱子学派の楊復が、朱熹の撰した『儀礼経伝通解』に基づき、繁雑な礼器と礼節を描いた『儀礼図』十七卷及び『儀礼旁通図』一卷である。楊復以前に著された礼図に関する作品を列挙すると、以下のようなになる。

- | | |
|-----|--------------|
| 佚名 | 『三礼図』二十卷 |
| 聶崇義 | 『三礼図集注』二十卷 |
| 陳祥道 | 『礼書』百五十卷 |
| 余希文 | 『井田王制図』一卷 |
| 龔原 | 『周礼図』十卷 (佚?) |
| 鄭景炎 | 『周礼開方図説』一卷 |
| 佚名 | 『江都集礼図』五十卷 |
| 項安世 | 『周礼丘乗図説』一卷 |
| | など |

これらの中で、聶氏の『三礼図集注』には誤りが多いことが沈括や歐陽脩らによって批判され、また朱熹からは「醜怪不經、非復古制」(『晦庵集』卷六十九、民臣礼議)と評された。王安石の門人である陳祥道が著した『周礼纂図』は散逸してしまい、また彼の『礼書』は保存されてきたが、広く読まれてこなかったことは事実であろう。その上、礼図は礼器図と礼節図という二つのカテゴリーに分類されているが、聶と陳の図には礼器図の方が多い。清代に至ると、分類してさらに明確に区別するやり方が多くみられるようになる。例えば、黄以周は『礼書通故』において「礼節図」と「名物図」を二章に分け、前者は趙彦肅・楊復に始まり、後者は漢代の叔孫通や鄭玄・阮諶から始まると判断した⁽³¹⁾。

2. 清代の礼図・儀礼図を例として

① 清代礼図の概略

清代に至ると礼図の編集が前代より多くなったことが、膨大な作品の数からうかがわれる。『皇清経解』及び『皇清経解続編』の収録状況から簡略に整理すれば、主要な礼図に関する書籍は次のように列挙できる。

- 『欽定儀礼義疏』『欽定周官義疏』『欽定礼記義疏』
- 徐乾学 『読礼通考』
- 任啓運 『朝廟宮室考附田賦考』
- 江永 『深衣考誤』『郷党図考』
- 万斯同 『廟制図考』
- 沈彤 『儀礼小疏』
- 諸寅亮 『儀礼管見』
- 戴震 『考工記図』
- 程瑤田 『儀礼喪服文足徵記』『宗法小記』『考工創物小記』
- 金榜 『礼箋』
- 汪中 『述学』
- 孔広林 『儀礼臆測』
- 孫星衍 『明堂考』
- 洪頤煊 『礼学宮室答問』

- 張惠言 『儀礼図』
- 焦循 『群経宮室図』
- 吳家賓 『喪服会通説』
- 鄒漢勛 『読書偶識』
- 鄭珍 『儀礼私箋』
- 陳喬樞 『礼堂経説』
- 俞樾 『士昏礼対席図』
- 黄以周 『礼書通故』
- 張之洞 『読経礼記』読聶氏三礼図礼記
- 張錫恭 『喪服鄭氏学』
- 曹元弼 『礼経学』

など

これらの膨大な作品の数から見れば、清代に至って礼図の研究が盛んになったことは明らかである。張之洞は嘗て「読聶氏三礼図礼記」の最後に、礼図の源流を論じながら、礼図が増加した原因は宋代の考古発掘の隆盛にまでさかのぼる（「宋の宣和年間に至り、朝廷が古を好み、故に発掘して進献し、競いて考釈を為す」と推測し、その上、清代に至って礼図がさらに精密になった理由を「好古」思潮（「国朝に至りて、古を好む者益ます多く、弁析益ます明らかなり」）に帰する。そして、張之洞は、清朝諸家の礼図のなかでは、江（永）・戴（震）・任（啓運）・程（瑤田）・張（惠言）・洪（頤煊）の作品が最も優れていると評価した。

③ 陳澧の礼図方法論解釈

清代の礼図研究は、およそ張之洞が述べる通りに整理できる。そのほか、広東の大儒である陳澧（一八一〇～一八八二）は三礼に関する専門書を撰しているわけではないが、礼図という方法に関して意義深い議論を提起しており、まずそれに注目したい。陳澧は『東塾読書記』において、『儀礼』の読解法について、次のように述べる。

『儀礼』は読みづらい。昔の人がこれを読んだ方法には、いくつかある。第一は節に分けることであり、第二は図を描くことであり、第三は例を積することである。今の人は古人の後に生まれたため、その方法を手して読めば、この経に通曉すること（三六）とは難しくないであろう。

陳澧によれば、『儀礼』は難解であるが、昔の学者たちは、三つのアプローチを行っており、図を描くというアプローチがその中に既に認められるということである。その点について、彼はまた四庫全書の館臣とは異なる見解を持っていたが、それは鄭玄が礼図を作ったかどうかという問題である。

『四庫全書総目提要』「三礼図集注」（一）（聶）崇義は郊廟祭玉を参定する際に、三礼図を取り上げ、およそ六つの版本を得て再び考訂した。…所謂六つの版本とは、鄭玄が一、阮諶が二、夏侯伏朗が三、張鎰が四、梁正が五、開皇によつて撰されたものが六である。しかし、『鄭志』を勘驗してみると、鄭玄は嘗てその図を作ったことがないとわかる。それは、鄭玄の学を学ん

だ者が図を作り鄭玄に託したものでないだろうか。

陳澧『東塾読書記』卷八…鄭（玄）、賈（公彦）が注と疏を作った時、皆必ず先に図を描いたはずである。いま注疏を読むと、至る所にその痕跡がみられる。例えば、士冠礼にある「筮人許諾、右還、即席、坐」という文言に対して、注は「東に面して命を受け、右に還つて北のほうに行き席に就く」といい、疏は「鄭玄が『東面受命』を知るのは、上文に、有司が西方にあつて東に面し、主人が門の東にあつて南に面するという内容があるからであり、よつてこの箇所では門の西で東に面し、主人の幸に命じられるので、『東面受命』であると知ることができる」という。…このような類は、歴然と目につくものである。また燕礼にある「主人盥洗象觚」という文言に対して、注は「象觚を取る者は東に面する」といい、疏は「膳筐が南にあり、有臣の筐を北に面して取ることはできず、南に面して君に背を向けることもできないため、また西の階から来れば、筐を東西に面して取ることはできないため、象觚を取る者は東に面する」ということがわかる」という。これらの内容からみれば間違ひなく、鄭玄は図があつたからこそ東に面して「象觚を取ることを知っていたのであり、賈公彦は図があつたからこそ「象觚を取る者は」北・南・西に面することはできず必ず東に面することを知っていたのである。（三七）

これら二つの資料を比較して読むと、四庫館臣は聶崇義『三礼図集注』が参照した「鄭氏図」を、『鄭志』に記録されていない

という理由で、鄭玄本人の作品ではないと主張したことがわかる。それに対して陳澧は、文献学の方法を用いず、礼学研究自身の方法に依拠して、「士冠礼」のような東西南北のどちらの方位に向かうかという混乱を招きやすい問題は図解でしか解けないと説明している。

このような発想に基づいて、陳澧は図形利用の方法論を強く支持し、特に儀礼の礼節について、図解は「事半ばにして功倍する」であると感嘆しつつ、「或いは転向し、或いは迴身し、平直にして見やすき者と同じからず、図有るに非ざれば、いづくぞ能く之を知らんや」という態度を示している。

④ 張惠言や黄以周の「儀礼図」について

陳澧は礼図研究について、特に前述の楊復『儀礼図』十七卷及び『儀礼旁通図』一卷を重視し、楊復は「創始の功ありて、没するべからず」と評した。陳澧の同時代において楊復の功績を受け継ぐ人があるとすれば、それは張惠言の『儀礼図』六卷であるとして、次のように述べる。

楊信齋（復）は儀礼図を作成したが、その功績は極めて偉大なものである。朱子がこれを目にするのできなかったのは惜しまれる。『通志堂経解』はこの図を刊刻したが、その書が巨帙のため入手しにくいので、楊信齋のこの図について述べる者は少なかつた。張舉文（惠言）が描いた図はさらに詳細精密であり、世の中に広く流行している。だが楊信齋の功績を抹殺し

てはいけない。^(二二八)

張惠言の儀礼図は、楊復の研究を踏まえた上で、一層綿密に構成されたものと評価される。張氏は清代吳派の重鎮であるが、漢宋調和の学風を礼図の継承からうかがうことができる。また、張惠言『儀礼図』の特徴については、次のようにまとめることができるであろう。

その一は、宮室の図を最初に扱うということである。その後ろに、衣服・士冠礼・士昏礼などがつづく。楊復の『儀礼図』の章立てと最も異なるのはこの点であろう。楊復は師の朱熹が著した『儀礼経伝通解』に基づき、『儀礼』の経文の順序にそのまま則って『儀礼』の経文を解説することを第一の目標としているからである。それに対して、張惠言の『儀礼図』は宮室の解明を重視し、実際に礼節を行う際に依拠すべき宮室や方位の知識を最初に把握しなければならぬと主張している。^(二二九)

その二は、専ら図を主としていることである。聶崇義・楊復らの礼図は、「書を主とし、図を輔とする」というスタイルであり、図形は書の補足説明として、経書解釈の二次的な方法となる。それに対して、張惠言の『儀礼図』は「図を主とし、書を輔とする」というスタイルを採用しており、同書全体が専ら図形によって完成されたものである。文字解釈については、別に『説儀礼記』を著して論じている。

その三は、図形のなかで、文字を詳細に加えて説明することである。張惠言の『儀礼図』全書は図形ばかりであるが、図形に対する補足説明は、全て図のなかで、小さな文字を書き加えるという形で

行っている。文字解釈には、鄭玄・賈公彦だけでなく、同時代人の江永・金榜らの見解をも引用している。このような体例は、後に黄以周（一八二八〜一八九九）の『礼書通故』の礼図にも見られる。晩清の礼学名家のなかでは、黄式三・黄以周父子の名声が高い。黄以周は『礼書通故』の中で礼節図について、次のように述べる。

礼節について図を描いたのは、趙彦肅と楊信齋に始まるが、「彼らの図では、」宮室の堂階がやや整えられたものの、法度が全く正確ではなかった。近來の張皋文の図は、法度礼教に比較的適するものである。しかし、「それら前人の図では、」居室が堂の五分の一で、場所が狭すぎ、礼を行うことができな^(三〇)い。西の房には北の堂があるのが、既に經典の文に相違する。堂の墻が兩房に連結することも、また序の位に背く。碑の深さが洗のようであれば、射礼の際に楅を設けられないだろう。闈が廟の東にあれば、冠礼の際にどうして母に見えることができようか。門にただ一つの闈があるのは、既に昔の誤りを踏襲している。塾にまた堂があることも、さらに憶測をたくましくしたものだ。宮室の大体の状況においてはこのように乖離があり、細かい礼節ならばなおさらである。これが礼節図を作る理由である。^(三〇)

黄以周は、趙彦肅・楊復らの礼図には創始の功があるが、不十分などころも多いと述べ、また、張惠言の礼図はより正確に作られているが、昔の誤りをそのまま踏襲するところも大いにある、と批判している。その上、黄以周自身は考証に精通しており、『礼書通

故』において、張惠言だけでなく、朱熹ないし鄭玄の解釈を論駁することが多い。黄が先人の図形を訂正した例として、「冠者見母」という礼節を以下に挙げてみよう。（図十一）「冠者見母」の礼は『儀礼』と鄭・賈の注疏において次のように説明されている。

『儀礼』士冠礼「冠者見母」…冠者奠饌于薦東、降筵、北面坐、取脯、降自西階、適東壁、北面見于母。母拜、受、子拜、送、母又拜。

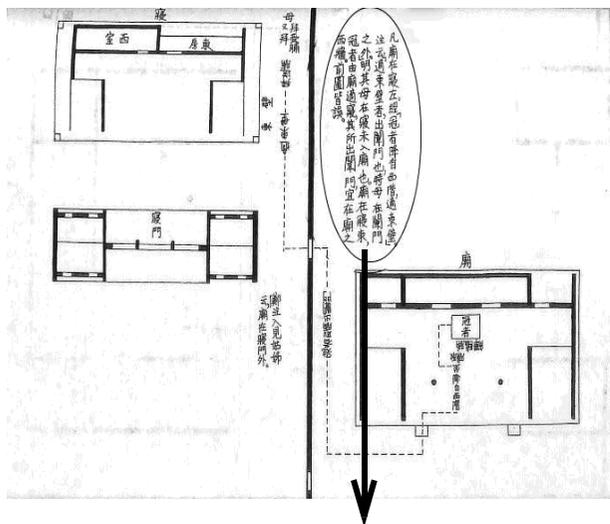
鄭玄注…適東壁者、出闈門也。時母在闈門之外。婦人入廟由闈門。

賈公彦疏…宮中之門曰闈門。母既冠子無事、故不在門外、今子須見母、故知出闈門也。

黄以周考案…凡そ廟は寝の左にある。経文に「冠者が西の階から降り、東の壁に適く」とある。（鄭玄の）注には「東の壁に適くというのは、闈門を出ることである。その時母が闈門の外にいるからである」というが、母が寝に在って未だ廟に入っていないことは明らかである。廟が寝の東にあり、冠者が廟から寝に適くならば、彼が出る闈門は廟の西の墻にあるはずである。前人の図は皆誤っている。^(三一)

「冠者見母」礼において、従来から「適東壁」に関しては論争がある。^(三一)鄭玄の注は、冠者が東壁へ行くのは「出闈門見母」のためである、という。それに対して、元代の敖繼公をはじめとする後世の学者らは「云適東壁而見之、則是時母位在此與」といい、冠者が廟の中で母に見えると主張する。黄以周は図十一で張惠言の見解を

排し、鄭玄注の内容を忠実に図で描くという立場を表明している。このように、礼の解釈では、図形を用いれば、論点の相違を簡易に示せることがわかる。



凡廟在寢左。
 經「冠者降自西階，適東壁。」注云：「適東壁者，出闈門也。時母在闈門之外。」明其母在寢未入廟也。廟在寢東，冠者由廟適寢，其所出闈門，宜在廟之西牆。前圖皆誤。

(図十一) 黄以周『礼書通故』礼節図一 冠、中華書局本

三 経図関係への再考

方法論としての図解が清朝の経書読解に広く応用され、また一層

の拡張や精錬とを加えられたことは、すくなくとも易と礼の二分野では事実であるということに間違いはないであろう。もちろん、宋明時代の經典解釈における図解方法を継承し、また明代中期から兆した図譜学(『三才図会』・『図書編』など)を踏襲した部分は夥しいが、清代の経・図認識が、前儒の残した塗徑をどのように醇化しつつ新見を開いたのかについて、次の三点を指摘したい。

第一に、図象を道・器觀念の革新と関連させて理解することを指摘したい。儒教經典のなかには、従来有形・無形の関係で道と器を論じる伝統があり、形而下の存在を器、形而上の存在を道と規定する。その場合、図象はもちろん、学問・文章なども道や理を伝達する器として理解されてきたが、清代に至って方法論としての図形が形而下以外の意味を備えているとの見解が現れた。例えば、方宗誠(一八一八〜一八八八)は「周子太極図説」において、

孔子が「形而上なるはこれを道と謂い、形而下なるはこれを器と謂う」というが、有形なものは器であり、無形なものは道であるといわず、ただ形而上・形而下というのは、よく道の体を形容した文言である。故に周子の図は、孔子の旨に合うものである。

と論じている。即ち、道・器の間には、有形・無形の区別による価値判断の基準が実は存在しないという認識であろう。そのほか、胡煦もまた「図は実在としてその図があるわけではなく、内外・体用を表す象である。卦は実在としてその卦があるわけではなく、万物が化する様がそこに浮かび上がっている」と述べ、有形・無形という

定見を持たずに図と卦が共通性を持つ存在であると主張している。^(三四)

有形・無形の問題に言及する以上、道教との関連性について弁明しなければならぬだろう。特に易図は道教系の文献にも頻出し、思想史上においては道教由来説が存在した。とはいえ、南朝の『文心雕龍』に「人文之元、肇自太極。幽讚神明、易象惟先」という文言があり、特に易の分野では形象が意味を伝える手段としてだけでなく、もともと存在物として認められていることを意味する。私見によれば、太極図のようなものは、道教から導入されたものだと主張が従来から存在したが、図象は必ずしも完全に道教的な要素であるわけでもなく、言説や文字の不足を補う上で限らない意味を展開できるものであり、儒教経典解釈の中においても屢々見られるものであろうと考えられる。

第二に、図象を文字と関連させて理解することを指摘したい。清末の章炳麟の文論の中では、図に関して次のような認識が見られる。

文字が興ったばかりの頃、本来は声氣の役割の代わりをつとめるものであったが、それは言葉より優れた功用があるためである。言語はただ線を成すだけである。例えば、空中における鳥の足跡のようなものは、見たと思ったら形は消えてしまっている。故に一事一義が連環する場合に、言語が役に立つ。ただ万物が集まって整えられないほど乱れると、言語の作用が十分でなくなくなり、故に文字に託す。文字の作用は、面を成すのに十分である。故に表譜図画の術が興った。^(三五)

これは文字が話し言葉とは異なる役割を持っているという角度から、「表譜図画」も広義の文字からの派生物として見ているものである。章炳麟は小学に長じ、特に文字学の分野において、情報伝達の媒介として声↓文字↓図譜への自然な発展を論じている。この考え方を伸ばしてゆくと、「左図右書」という古来の読書法が清代に改めて論じられたと言えるかもしれない。「左図右書」という言い方にはまだ図象よりも文字のほうが重要だという定見があったが、それに対して、清の潘耒（一六四六〜一七〇八）が「左図右書、書藉図以明」^(三六)と述べ、一層図象の史料価値を強調するようになった。胡煦の所謂「明周易者、断自図書始」という発言もその類である。

第三に、図象を清朝における西学の発達と関連させて理解することを指摘したい。この点は筆者の学力では、十分に展開できないが、『河洛精蘊』を著した江永と『考工記図』・『句股割圓記』を著した戴震とが、ともに天文曆算学に通曉し、清代學術において異彩を放っている。清末の類似著述を挙げれば、楊履泰の『周易倚數錄』（咸豐十年作）といった、易と数学の算式・方圓を組み合わせて解釈するようなものもある。もちろん、江永の『河洛精蘊』において、河図・洛書を、数学・律曆・天文・音韻などの諸々の理論と関連させているのは、前儒の残したものに基づいてそれを発展させたものであるが、円周率や句股術などの様々な数学理論を河洛の數と徹底的に関連付けるといふやり方は、清朝以前にはなかった動きである。^(三七)

そのほか、朝鮮儒教文化には、言語の差異によって図解を利用して経書を解釈するという方法が夥しい書物に見られる。その例を挙

げると、宋代の学者である程復心（一二五六～一三四〇）の『四書章句』が、朝鮮に流入してから広く影響を及ぼした。高麗時代の権近（一三五二～一四〇九）が著した『入学図説』から、名儒李退溪の『聖学十図』や近代の金梶（一八九六～一九七八）の「第九大学図 大学経伝新図」に至るまで、前後六百年あまりの時期に、朝鮮儒典解釈史には、膨大な数の図説の成果が得られ、儒教の經典受容や経義解釈に重要な役割を果たしたといえる。

おわりに

本稿は特に経書読解の図解方法論に注目したものである。清代経学においては、特に易と礼の二大分野において、従来の図解を批判する面もある一方で、図解の方法を用いて象数的な易学を展開したり、礼節を解説したりする傾向も同時に存在したといえよう。要するに、経書の内容を図形化することは、方法論としては比較的直観的であり、複雑な文字による説明を省略できるという優れた点があるために、広く応用されつつ発展してきた面がある。

このような図形を経書解釈に広く利用する学風を受け継いだ清末の状況を一瞥しておこう。晩清の張之洞は「中体西用」の治国方略を提唱し、彼が主張した経書の教育体系においては、まず「七端」の項目が決められ、それぞれ「明例」「要旨」「図表」「会通」「解紛」「闕疑」「流別」と名付けられ、その中で「図表」は経学を解明するための重要な手段となった。また、彼は清代の研究者たちが図形の利用に秀でており、前の時代より優れていると賞賛した。

曹元弼らが、嘗て張之洞の命を奉じ、両湖書院や存古学堂の経学教科書として『周易学』『礼経学』『孝経学』を完成し、三書の中で、いずれも「図表」の一節を設けた。例えば、『周易学』には「天地之数」、「八卦布散用事」、「八卦納甲」、「反卦與旁通表」、「惠氏卦氣六日七分図」、「惠氏十二消息主七十二候図」、「張氏十二消息卦氣図」、「十二月爻辰図」などの図表が収録されている。『礼経学』も同様に張惠言の礼図を大量に載せている。『周易学』図表第三を例として、曹元弼は以下のように図表の趣旨を語っている。

六芸とは、図から生まれたものである。伏羲が卦を画いたが、卦は即ち図である。惠（棟）張（惠言）の図易は、古義によるものであり、その消息を審察して物事の終始を推知すること、十分に天人の故、性命の理、否泰・倚伏の機、殃慶・由来の漸を察することができ、そして聖人の吉凶によって民と憂患を共にする心、混乱を鎮めて正常に戻す用、また時によって進退して正しさを失わない道、を得られる。思うに（六芸は）七十子の残した学と漢の諸師の精義はここにおいて明らかとなる。ただし生著・立卦・生爻などのことは、十翼の本文を検証しても、その順序にはまだ乱れたところがある。私は聖伝によってこれを正し、「明例」に記し、また諸図を配列し、この篇に載せた。図と例が互いに応じ、木の枝と枝、葉と葉が互いに合三わさるようであり、童蒙であつても一見して悟ることができる。

曹元弼の場合、易図を重視する理由は、何と言っても易図の直観性のためである。清代易学の主な研究対象である漢易には複雑な数や象が多く、文字より理解しやすいということが図形の特徴であるといつてよい。曹元弼は図を用いる方法を高く評価している。入門者でさえも一見して理解できるような利便性があるため、図形の代表である九図が強く批判されたとしても、清代の易図は強い生命力を持ち、自己の存在と意義を保ったといつてもよいであろう。

その上、図形を広く利用する現象から窺われるのは、清代学術においても図形の価値が認められている、という点である。一種の情報を伝える媒介として、文字のほかに、図形も研究の対象となり得ることが、清代の易研究者たちに意識されてきた（胡渭・胡煦など）。胡煦や陳澧のような儒者の発言から見れば、経と図の関係に対する検証が根本的に模索されていたことがわかる。特に、図形を描いて思想を説明する学術パラダイムが、明清における西学の輸入、または数学・幾何学から影響を与えられたという可能性も考えられ、ここには或る程度の西学との融合を看取することができる。このような観点については今後の課題にしたいと思う。

《注》

- (一) 本稿では、図解の増えた原因に対する考察を保留とする。小島毅氏から、印刷技術の発展・読書層の拡大などが図解方法が流行する原因として考えられる、との指示を受けた。非常に示唆的であり、筆者にとっての今後の課題にしたい。
- (二) 九図というのは、現在我々が見られる朱熹の『周易本義』諸版本の

冒頭にある河図、洛書、伏羲八卦次序、伏羲八卦方位、伏羲六十四卦次序、伏羲六十四卦方位、文王八卦次序、文王八卦方位及び卦変図という九つの図のことである。

(三) 『顧炎武全集』第十八冊『日知録』巻一（上海古籍出版社、二〇一二年）、八五～八六頁。

(四) 戸田豊三郎「清朝易学管見」〔『広島大学文学部紀要』二二卷、一九六三年、一二七頁。〕

(五) 現代学術における易図研究としては、一九八〇年に台湾の徐芹庭氏に「民国以来象数与義理派之易学」という文章があり、清末の易研究者たちには「図書派」が存在したという指摘がある。また、大陸では一九八七年に出版された董光璧氏の『易図的数学結構』（上海人民出版社）という小冊子とその代表例である。そのほか、郭彥氏の研究に行する李申氏の『易図考』（北京大学出版社、二〇〇一年）は専ら易図（主には九図）の源流を分析したものである。二〇〇二年に台湾で出版された鄭吉雄氏の『易図象与易詮釈』（台北・喜瑪拉雅研究發展委員会）においては、太極図をめぐる儒道論争や、清朝の『易図明弁』が分析されている。その後、李申氏と郭彥氏の研究の延長として、陳居淵氏が著した『漢学更新運動・清代学術新論』（鳳凰出版社、二〇一三年）があり、その中では易図の使用が清朝經学研究の特徴として論じられている。

(六) 胡渭『易図明弁』（中華書局、二〇〇八年）、一頁。

(七) 胡煦『周易函書』一（中華書局、二〇〇八年）、一頁。

(八) 主に山東図書館『易学書目』及び郭彥『易図講座』（華夏出版社、二〇〇七年）を参照してリストを作成した。

(九) 北宋の周惇頤が「太極図」を作ったというのが従来の主要な説であるが、朱彝尊「太極図授受考」、毛奇齡「太極図説遺議」、胡渭『易図明弁』、張惠言『易図條弁』などによって批判された。彼らの要点をま

とめてみれば、主に以下の三点になる。第一に、道教には既に太極、三五の説があり、太極図は道教によって代々伝えられたものである。

第二に、二程子は周惇頤から太極図を学んだことがない。第三に、太極図は『禪源諸詮集都序』の「十重図」に似ているため、禪宗に由来する可能性もある。以上の説について、吾妻重二は「太極図の形成——儒仏道三教をめぐる再検討」において一一反駁した（『日本中国学会報』第四六集、一九九四年十月）。そのほか、戸田豊三郎「周子太極図とその源流」（『易学注釈史綱』所収、風間書房、一九六八年）と土田健次郎「二つの太極図」（『大倉山論集』四五輯、二〇〇〇年）に詳しい解説が展開されている。

(一〇) 劉牧が図の後で「太極無数与象、今以二儀之氣混而為一以畫之。蓋欲明二儀所從而生也」と記している。白点と黒点を五つずつ用いて線で結び、一つの丸を形成する。ほかには文字を加えていない。後文の説明から見ると、陰と陽の気を白点と黒点で象徴させ、二気が互いに依存して混合することを示そうとするものである。

(一一) 周惇頤の太極図は広く知られている。その特徴は、点の代わりに、円と文字を使って、図形を幾重にも重ねているということである。

(一二) 趙撝謙の「古太極図」は現在我々が熟知している「魚図」のような太極図である。丸の周りに八卦を先天数の順番によって配列している。陰陽が互いに転換しつつ統合する意を伝えている。

(一三) 胡煦は一連の「循環図」が完全に自己体得したものであると述べたが、筆者が読む限りでは、明代の韓邦奇の『啓蒙意見』及び来知徳の『易図来注』には、実際に胡煦の図に類似する円図が見られる。

(一四) 胡煦『周易函書』一（中華書局、二〇〇八年）、五頁。

(一五) 注（一四）前掲書、三十三頁。

(一六) 胡煦はまた、「循環図」のことを二巻の紙幅を用いて詳しく説明した。易の循環の理を極めて重視したようである。

(一七) 注（一四）前掲書、三十五〜三十六頁。

(一八) 惠棟『易漢学』下冊（中華書局、二〇〇七年）、六一二頁。

(一九) 注（一八）前掲書。

(二〇) 同図は、陳建明主編『馬王堆漢墓研究』（岳麓書社、二〇一三年、四十七頁、彩図五十四）などの出版物に掲載されており、また湖南省博物館の公式サイトでも閲覧できる（url: <http://www.hnmuseum.com/hnmuseum/collection-info/collection-info/frontCollectionDetail.action?1.d=281e5548ef6484bf77a1c779ff6>）。

(二一) 陳祥道の『礼書』について、晁公武は『郡齋讀書志』において「解礼之名物、且繪其象、甚精博」と高く評価し、ただし「予愛其書、恨其缺少」と述べ、同書は南宋時代から十分に流通していなかったということがわかる。『四庫全書提要』に「其書固甚為當世所推重、不以安石之故廢之矣」とあり、当時重んじられていた書物であったため、王安石系だからという理由で斥けられることはなかった。

(二二) 黄以周『礼書通故』礼節図一…「礼節有図、昉于趙彥肅・楊信齋」。（中華書局、二〇〇八年頁）『礼書通故』名物図一「礼器制度、昉于漢叔孫通。鄭・阮礼図、多本其說」。（中華書局、二二五七頁）そのほか、清代『欽定儀礼義疏』凡例…「聶氏崇義『三礼図』、專図名物器用。楊氏復『儀礼図』則図行礼之節次、而名物器用不与焉。二図不可偏廢」といった。

(二三) 張之洞『説経礼記』説聶氏三礼図礼記、『張之洞全集』卷二百七十八、九九九六頁。

(二四) 注（二三）前掲書。

(二五) 張之洞…「欲曉古礼器・礼制、須看江慎修・戴東原・任幼植・程瑤田・張皋文・洪筠軒諸家図説、呂大防・薛尚功・阮伯元・劉燕庭・吳荷屋諸家款識、張蒿庵・凌次仲・二金（榜・鶚）、皆国朝礼学名家、然於服器図式不詳、故止称前数家。」（注（二三）前掲書）

- (二六) 陳澧『陳澧集』「東塾讀書記」卷八（上海古籍出版社、二〇〇六年）、一三八頁。
- (二七) 注 (二六) 前掲書、一四〇頁。
- (二八) 注 (二六) 前掲書、一四二頁。
- (二九) この点について、阮元は『儀礼図』への序において、次のように説明している。「頌即容也。後儒以進退揖讓為末節、薄之不講、故言朝則闕于門揖曲揖、言寢則眩于房室階夾；予嘗以為說礼者當先為頌。昔叔孫通為編菴以習儀、他日亦欲使家塾子弟畫地以肆礼、庶於治經之道、事半而功倍也。然則編修之書非即徐生之頌乎。；編修以為治儀礼者當先明宮室。」阮元は張惠言を漢代の徐生に譬え、張が礼の実用性を強調する立場から、『儀礼』を治める際には宮室を最初に説明すべきであると考へたことを評価した。
- (三〇) 黄以周『礼書通故』（中華書局、二〇〇七年）、二〇八八頁。
- (三一) 注 (三〇) 前掲書、二〇九五頁。
- (三二) この争点に関するより詳細な紹介については許子濱「『儀礼・士冠礼』冠者取肺適東壁見母解」（香港：『中国文化研究所学報』五九、二〇一四年）を参照されたい。
- (三三) 方宗誠『柏堂集後編二十二卷』卷二「周子太極図説」（清光緒七年十二月開彫本、一八八二年）
- (三四) 胡煦、注 (二四) 前掲書、三二二頁。「図非實有是図、皆内外體用之象也。卦非實有是卦、皆万物化生之易縣也」
- (三五) 章炳麟『国故論衡』「文学総略」（上海古籍出版社、二〇〇三年）、五十四頁。
- (三六) 潘耒『遂初堂文集』卷二「易図論」（清康熙年間刻本、浙江図書館所蔵）
- (三七) 川原秀城「律曆淵源と河図洛書」、『中国研究集刊』（大阪大学）列号、一〇二二頁、一九九五年。
- (三八) 曹元弼『周易学』図表第三（宣統紀元刻本）。